



労働組合は社会主義のための学校である

マルクスは「労働組合は社会主義のための学校である」といいました。

目の前の資本の合理化攻撃に対して闘うことによって労働者は鍛えられ、階級的使命に目覚め、その力は社会主義政党と結合し社会変革の原動力になるのです。

しかし現在の日本の労働組合はどうでしょう。「労働使協調」資本の言いなり」「幹部請負」「民主主義の否定」「政治闘争」「反共」が常態化しています。これはいうまでもなくナショナルセンターである連合のやり方です。特に富士社会教育センターで反共思想を学んだとされている芳野友子氏が会長になってからは、やり方が露骨です。おかしいとモノをいう労働者は少数のように思えますが、大多数の労働者の怒りや要求を集約していかないというのが本当ではないでしょうか。怒りを集約し反体制を明らかにすることが、資本と

まく付き合っていくこうとする連合にとって不都合であるからです。

日本の労働者階級には未来がないように言いましたが、そうではありません。粘り強く闘い続け、活動家を輩出している労働組合があります。その労働組合の内部にはまなぶ友の会や社会主義青年同盟があり、青年労働者に影響を与え、しっかり階級的視点での学習が行われています。また社会主義政党とも結合しています。その労働組合が局地的な闘いに終わるのではなく、広範な労働者と連帯していくことが私たちの手に未来を引き寄せる鍵です。



労働大学 副学長 吉田 英和